

明治以降の『史記』研究

藤 田 勝 久

はじめに

これまで、日本の『史記』受容と研究について、江戸時代までを簡単に概観した〔文献 20, 21〕。そこで本稿では、これにつづく明治以降の『史記』研究を述べてみたい。

幕末から明治にかけて、日本の漢学をめぐる情勢は大きく変化した。この間の事情は、斯文会編『日本漢学年表』（大修館書店、1977年）や、町田三郎『江戸の漢学者』（研文出版、1999年）、同『明治の漢学者』（研文出版、1998年）に詳しい。町田氏は、後者の序「明治漢学覚書」で以下の区分をしており、『史記』受容に関連する背景がうかがえる。

第一期：明治元年（1868）～10年代初め、漢学の衰退と啓蒙思想の隆盛

第二期：明治10年代初～22・23年（1885, 86）、古典講習科と斯文会の活動

第三期：明治24・25年～35・36年（1902, 03）、東西哲学の融合と日本学への注視

第四期：明治37・38年～末年（1912）、日中学術の総合、漢文体系その他また日本で、明治から大正（1912～26）、昭和（1926～89）に変わる時期と並行して、中国では1912年に清国が滅んで中華民国となり、1949年には中華人民共和国が成立した。ここでは中国における清朝考証学の動向から、日本の明治

以降の『史記』受容と研究をたどってみよう。

1 『史記』の普及と和訳の始まり

『史記』のテキストと清朝考証学

明清時代から新中国にいたる『史記』の研究は、張新科・俞樟華『史記研究史略』（三秦出版社、1990年）に詳しい。また『史記』のテキストについては、のちに普及版の標点本『史記』（中華書局、1959年第一版）が刊行されるが、その出版説明にも概略を記している。

その説明によると、清の『四庫全書總目提要』が記すように、『史記』の本文に三家注を配列することは北宋時代から始まるが、旧本はみな失われ、現存する早い版本は南宋の黄善夫本で、のち百衲本二十四史（商務印書館影印）に収録された。このほか明の嘉靖・萬曆年間に刊行された二十一史本と、汲古閣の十七史本がある。清の乾隆期には、武英殿刊の二十四史本があり、もっとも通行したという。また清の同治年間には、金陵書局が『史記集解索隱正義合刻本』130巻を刊行した。この金陵書局本は、張文虎が各種の旧刻古本を校訂したもので、清朝後期の善本といわれる。ちなみに標点本『史記』は、この金陵書局本を底本とし、顧頡剛・徐文珊氏らが新たな断句と標点をし、分段整理をした白文校本『史記』（北平研究院、1936年）を基礎にしたものという。この動向と同じく、日本の瀧川亀太郎『史記会注考証』も、最終的に金陵書局本を底本としている。

また清朝考証学より以降の『史記』の注釈・研究は、つぎのように説明されている。清代初期から1905年まで、『史記』に関する文章を書いた学者は、300人前後で、論文は160数篇、専著は数十部という。その中には、顧炎武『日知録』、章学誠『文史通義』や、方苞『史記注補正』、汪越『読史記十表』、趙翼『廿二史劄記』、王鳴盛『十七史商榷』、錢大昕『廿二史考異』、王念孫『読書雜志』、梁玉繩『史記志疑』、張文虎『校勘史記札記』、沈家本『史記瑣言』などがふくまれている。これらの特徴として、①文字の校訂、②地名・人名の校訂、

③年月の校訂，④司馬遷の字，卒年，作史の年齢，李陵の禍など経歴の考証，⑤書名，断限，補欠の考証，⑥史実の考証などをあげている。またこの時期には、『史記』の紀伝体の構成と，十表の評価，「太史公曰」の論贊に関する論評や，文章・人物描写に関する研究が進んだという。

つぎに1905～1949年までの時期では，先人の成果をうけて，論文約110篇，専著数十部の発展があった。その代表的な研究には，崔適『史記探源』，魯実先『史記会注考証駁議』，張鳳一『太史公年譜』，鄭鶴声『司馬遷年譜』，李長之『司馬遷的人格与風格』があり，また章炳麟，梁啓超，羅振玉，王国維や，顧頡剛，呂思勉，郭沫若，翦伯贊などの著書にも『史記』に対する論述がある。そして考証・評論でも新たな進展があり，そのテーマは，司馬遷の生年，司馬談の作史，『史記』の補欠や，紀伝体の体例，『史記』成立の原因などをあげている。またこの時期には，梁啓超が『中国歴史研究法』『要籍解題及其読法』などで一般と専門的な読法を奨励したことは，『史記』の普及に貢献したという。

中国旅行記と『史記』

わが国の『史記』受容で，最初に注目されるのは，明治から大正時代以降の日本人による中国旅行記である。これは直接的な研究ではないが，当時の日本人が中国の歴史と文化を理解するとき，『史記』をどのように見ていたかを知ることができる。また，かれらの中国旅行記が刊行されると，それによって『史記』の内容が普及するという効果もある。ここでは，そのいくつかを眺めておこう。

竹添進一郎（井井）は，明治9年（1876）5月～8月に，北京から西安，四川省方面へ旅行し，『棧雲峽雨日記』（1878，小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第19巻，ゆまに書房，1997年）を残した。同書の岩城秀夫訳注『棧雲峽雨日記』（平凡社東洋文庫，2000年）は，日記の翻訳に竹添の漢詩も収録しており便利である。そこでは，行く旅先で漢学の素養として『史記』の故事を理解している。

（5月）5日，過良郷県，県南三里，有楽毅墓。……宿涿州，涿州即涿鹿，

黄帝故都。

6日、経定興県、渡易水〔「渡易水」の七言絶句〕。

12日、燕趙之郊〔「予讓橋」の七言絶句〕。

13日、経沙河〔「蘇秦亭」の五言古詩〕。

14日、過廉頗墓、……過杜村店、為藺相如故里。

24日、……抵 池県灤城西有秦趙会盟処〔「楚坑行」の七言古詩〕。

27日、渡弘農澗、入函谷旧関〔「函谷関」の七言古詩、七言絶句〕。

30日、……過新豊街、古鴻門也〔「鴻門」の七言古詩〕。

31日、……扞史、秦用鄭国謀、富強甲於天下。

(6月) 3日、……入咸陽県、宿焉。漢渭城也〔「咸陽」の七言絶句、「始皇」の七言律詩〕。

13日、……過廢丘関、項王封章邯処。

14日、……踰柴関嶺、石路高峻、下阪十里、抵紫柏山、有留侯祠〔「留侯祠」の七言律詩〕。

また内藤湖南は、明治32年(1899)8月～11月に中国を訪れ、『燕山楚水』禹域鴻爪記(1900、『内藤湖南全集』第二巻、筑摩書房、1976年)を残した。ここでは、日本を出発して山東半島の芝罘を過ぎるとき、『史記』秦始皇本紀と封禅書を引用して地勢を述べたり、蘇州で姑蘇山の呉王闔廬・夫差に思いをいたすとき、「太史公が姑蘇に上りて、五湖を望むといへるも、或いは此処ならざるか」と感想を述べている。

こうした日本人の中国旅行記は、中国でも注目され、以下のような翻訳がある。

- ・内藤湖南・青木正児著、王青訳『兩個日本漢学的中国紀行』燕山楚水、江南春など(光明日報出版社、1999年)
- ・吉川幸次郎著、錢婉約訳『我的留学記』(光明日報出版社、1999年)
- ・宇野哲人著、張学鋒訳『中国文明記』(光明日報出版社、1999年)

また鳥居龍蔵は、明治35年(1902)7月～36年(1903)3月まで、貴州・雲南・四川省に少数民族のフィールドワークを行い、『人類学上より見たる西南支

那』(1926、『鳥居龍蔵全集』第10巻、朝日新聞社、1976年)を刊行した。その中で『史記』の記述にふれているが、興味深いのは『ある老学徒の手記』西南シナの旅(1953、『鳥居龍蔵全集』第12巻、朝日新聞社、1976年)に記された研究方法である。ここには、『史記』をはじめとする文献をフィールドワークと意識的に結びつける方法論がある。

この中国行以後、私の研究方法は大分変化して来た。これは文献との関係である。台湾生蕃研究には古い文献はあまり必要はなかった。けれども西南種族に至っては、古来中国に多くの文献があり、古くは『書経』『史記』『漢書』『後漢書』以下から明・清に至る記述、続いて『府志』『県志』『庁志』等に至るまで読まねばならぬ。……これは私の頭脳の一変化した一エポックである。

こうした旅行記が書かれたのは、いわば『史記』の啓蒙時代であるとともに、学術的な研究がすすむ時期でもある。だから日本人による中国旅行記は、当時の漢学者・歴史家、人類学者たちが見た近代中国を知るとともに、『史記』や文献に対する考えをうかがう貴重な資料といえよう。

『史記』版本と和訳本

町田三郎氏は、明治時代の初期に漢学が一時衰退したが、明治10年に東京大学が設置され、15年(1882)に文学部の古典講習科が設けられたことは、のちに東洋学の俊才を輩出したと評価し、その中に瀧川亀太郎氏や日本漢学史の岡田正之氏等をあげている。またこの時期には、大学や中学校などで漢文のテキストとして、数種類の『史記評林』が刊行された。池田英雄氏は、明治になって20余年の間に、多くの諸本や口語体の講義録が刊行された動向を注目している。

- 1) 『鶴牧版増訂史記評林』田中篤実、豊田一貫、関利器等(玉山堂、明治2年、1869)
- 2) 『校字訓点史記評林』奥田遵(修文館、明治12年、1879)
- 3) 『増訂史記評林』大郷穆、伊地知貞馨等(修道館、明治14年、1881)

- 4) 『校訂訓点史記評林』藤沢恒（同盟書楼，明治14年，1881）
- 5) 『明治新刻史記評林』鈴木義宗（明治14年，1881）
- 6) 『補標史記評林』有井範平（報告社，明治16年，1883）
- 7) 『増補評点史記評林』石川鴻斎（鳳文館，明治16年，1883）
- 8) 『評林史記列伝』70巻，栗本長実（東京同盟出版書房，明治26年，1893）

また『史記』の講義録には，以下のような著作がある。

- 1) 『史記列伝講義』1巻，村上徳淳（明治25年，1892）
- 2) 『鼈頭解釈史記列伝講義』2巻，岡道（明治25年，1892）
- 3) 『史記列伝講義』16巻，稲垣真久章（少年叢書漢文学講義本，明治25年，1892）
- 4) 『史記列伝講義』3巻，城井寿章（支那文学史全書本，明治26年，1893）

これらの和刻本『史記評林』の刊行につづいて，重野安繹校訂『史記列伝』上・下（漢文体系，富山房，明治44年，1911）が刊行された。明治における漢文体系の位置づけは，町田前掲書の「『漢文体系』について」に詳しいが，これは『史記評林』の列伝部分を出版したものである。しかし同時に，新たな『史記』注解が現れ，これがのちに『史記補注』と『史記会注考証』につながることが注目される。

池田四郎次郎『校注史記読本』第1冊，本紀（明治26年，1893）

同 『校注史記読本』第4冊，列伝（明治26年，1893）

同 『校注史記読本』第5冊，列伝（明治27年，1894）

また日本で初めての漢文書き下しによる『史記』の和訳本が出現した。

田岡嶺雲『和訳史記列伝』上・下（玄黄社，明治44年，1911）

この形式は，のち大正時代以降に，以下のような訳注や国字解を生むことになり，『史記』の普及に貢献するものである。

1) 塚本哲三『史記』1～6（漢文叢書，有朋堂書店，1920～1927）

2) 公田連太郎訳註『史記』1，2（国訳漢文大成，国民文庫刊行会，1922・23）

箭内互訳註『史記』3列伝上，4列伝下（国訳漢文大成，国民文庫刊行

会，1922)

- 3) 桂 五十郎『史記国字解』1, 2 (早稲田大学出版部, 1928・29)
菊池三九郎『史記国字解』3, 4 (早稲田大学出版部, 1929)
松平 康国『史記国字解』5, 6 (早稲田大学出版部, 1929)
牧野謙次郎『史記国字解』7, 8 (早稲田大学出版部, 1929)
- 4) 加藤繁・公田連太郎訳『訳注史記列伝』全3冊 (富山房, 1940~42)
- 5) 加藤繁『史記平準書・漢書食貨志』附; 『史記』貨殖列伝 (岩波書店, 1942)

『史記』古鈔本の影印刊行

大正時代以降では、『史記』古鈔本の影印刊行が特色となっている。これは当時において、今日の出土資料に匹敵する新資料とみなされたものであろう。だから羅振玉・王国維編『流沙墜簡』(京都, 東山学社, 1914年)の敦煌漢簡や、神田喜一郎輯『敦煌秘籍留眞』(京都, 1938年)の新出資料と同じ時期に刊行され、のちに『史記』をふくむ文献研究の基礎になったと思われる。

- 1) 影印史記「殷本紀残卷」(『吉金叢書四集本』羅振玉の識語, 大正6年, 1917)
 - 2) 影印古写本史記残卷 (羅振玉刊, 大正7年, 1918)
河渠書第二十九, 張丞相列伝第九十六, 酈生陸賈列伝第五十七
 - 3) 『古写本史記残卷河渠書第二十九』内藤虎次郎序 (神田信暢刊, 1919)
 - 4) 『古鈔本史記呂后本紀』(古典保存会, 1935)
 - 5) 『古鈔本史記孝景本紀』大東急文庫蔵本影印 (京都帝国大学文学部刊, 1935)
 - 6) 『古写本史記残卷』(古典保存会, 1938)
張丞相列伝第九十六, 酈生陸賈列伝第九十七影印
 - 7) 『古鈔本史記孝文本紀』東北大学本影印 (貴重古典籍刊行会, 1954)
 - 8) 『史記残一卷; 存卷第十』武内義雄解説 (貴重古典籍刊行会, 1954)
- また室町時代の『史記桃源抄』は、江戸時代に版本として刊行されていたが、

それについて新村出「桃源瑞仙の事蹟」(『史学雑誌』17-11, 12, 1906)の紹介があり、さらに三ヶ尻浩編『史記抄』瑞仙桃源抄3冊(私家版, 1937, 38年)が刊行された。ここには附録として、「漢文和読史上ヨリ見タル室町時代ノ抄物ニ就テ」「史記抄解題」などが付けられ、テキストとしても貴重なものである。

以上のような『史記』古鈔本や『史記抄』の刊行に関連して、昭和時代になると、つぎのような研究が生まれた。これらは日本の『史記』研究にかかわる独自の内容であり、古鈔本を用いて『史記』本文を考察していることが注目される。

那波利貞「旧鈔本史記孝景本紀第十一解説(上・下)」(『支那学』8-3, 4, 1936)は、京都帝国大学文学部が刊行した影印本について、その体裁と年代、筆者の大江家国の考証や、本文の校勘を行っている。

大島利一「桃源瑞仙の史記抄を読む」(『東方学報』京都10-1, 1939)は、桃源瑞仙の経歴と、史記抄の特徴を考察し、同「大島賛川・桃年父子の史記考異について」(『東洋史研究』4-3, 1939)は、江戸時代の大島父子の業績を考察したものである。

武内義雄「国宝史記孝文本紀解題」(『支那学』12-1・2, 1946)は、『史記』三注合刻本の系統や、『史記』集解本を概観し、本文の字句の考証から、その価値を述べている。

2 明治・大正時代の『史記』研究

司馬遷と『史記』の啓蒙

明治時代には、『史記』のテキストと和訳が普及しはじめたが、これ以降に『史記』の啓蒙と研究が進んでいる。たとえば明治末には、藤田豊八ほか6人による『支那文学大綱12・司馬遷』(1897年)が出版され、大正時代には、司馬遷と『史記』の解題に関する論文が現れた。その一つに『東亜研究』2-4号(1912年)の『史記』特集がある。

- ・小牧昌業「司馬遷の史記」

- ・日下寛「史才と文章上より視たる司馬遷」
- ・中村久四郎「司馬遷年表並に其孝道」
- ・児島献吉郎「司馬遷の性行と史記の文章」
- ・宇野哲人「太史公の当代思想家評論に就て」
- ・鈴木虎雄「司馬遷と賦」 ・鳥山喜一「私議」 ・本城蕢「史記解題」
- ・岡田正之「史記の日本文学に与えし影響の一瞥」
- ・武藤長平「史記と外史—勸善懲惡の主義と善惡応報の思想」

このうち「司馬遷年表並に其孝道」の序文によると、この雑誌が出た2年前頃、東京大学東洋史談話会の席上で、支那史家十傑の投票選評を行い、司馬遷が2位であったという。

- 1 孔子, 2 司馬遷, 3 左丘明, 4 劉知幾, 5 杜佑,
6 司馬光, 7 顧炎武, 8 顧祖禹, 9 趙翼, 10 崔述

ここから明治末～大正初にかけて、司馬遷が高く評価されており、この特集が組まれた背景の一端がわかる。また特集の論文は、簡略ではあるが、司馬遷の経歴や『史記』の文章・性格を論ずるほかに、すでに日本の『史記』受容にかかわる影響を論じた2篇が注目される。これは『史記』の研究史につながるものである。

また『東亜研究』には、つづいて『史記』の論文が掲載されたが、先の児島献吉郎・本城蕢両氏と池田四郎次郎氏らは、二松学舎の三島毅（中洲）から学んだ者であり、東京における『史記』研究の学統がうかがえる。

- ・三島毅「貨殖伝の大意」「貨殖伝に就いて（承前）」（『東亜研究』2-6, 7, 1912年）
- ・池田四郎次郎「読伯夷伝条弁」（『東亜研究』5-4・5, 1915年）漢文体一方、大正2年（1913）頃には、内藤虎次郎（内藤湖南）が「史記の話」（のち『智慧』1号, 1946年）を講演している。三田村泰助『内藤湖南』（中央公論社, 1972年）によると、すでに内藤は京都大学に就任した直後、明治41年（1908）2月に狩野直喜、富岡謙三氏らと3人で『史記』の会読を始めていた。それは、第一回の会読のあと稲葉君山に宛てた手紙に「太史公史記研究会相始め申候、

五帝本紀の標題丈で一日かかり埒明かぬなど滑稽なほど骨が折れ申候」という様子であったが、いつまで続いたかわからないという。こうした会読と研究の蓄積が、講演の基礎にあるのだろう。

講演の内容は、この当時、『史記』はよく読まれているが、その性質を考えるものは少ないと述べており、歴史学のあり方にも及ぶ内容である。これは、いわば啓蒙的な業績といえよう。また内藤湖南には、京都大学での講義ノートをまとめた『支那史学史』（弘文堂、1949、のち『内藤湖南全集』第11巻、筑摩書房、1969年。『支那史学史』1・2、復刊、平凡社東洋文庫、1992年）がある。例言によると、第一回は大正3・4年度に行われたが内容は不明で、第二回は大正8・9・10年度の3年間（1919～1922）、第三回は大正14年度で「清朝の史学」が題目であったという。『史記』の講義は、第二回のもので、早い時期の『史記』研究となろう。

王国維の『史記』研究

こうした日本の動向は、王国維の『史記』研究にも影響を及ぼしたと思われる。この点を少し述べておこう。

王国維は、1911年の辛亥革命のとき、羅振玉にしたがい京都にやって来た。その滞在は、1916年2月に上海へ帰国するまで約4年あまりであった。この期間に、かれは藤田豊八、鈴木虎雄の両氏、京都大学の狩野直喜、内藤湖南氏たちと交わり、その関心は文学・哲学から、中国古代史や甲骨文字・簡牘資料の研究に変わったという。またこの時期には、『十三経注疏』と『史記』『漢書』など前四史を精読したといわれ、出土資料研究の先駆けとなる「簡牘検署考」や多くの中国古代史の論文は、このとき執筆された。

当時の学術関心を知る資料に、『盛京時報』に連載された『東山雜記』（1913年7月～14年5月）、『二牖軒隨録』（1914年9月～15年7月）がある。これらは『王国維學術隨筆』（社会科学文献出版社、2000年）として刊行された。

『東山雜記』では、中国古代制度、考古文物、封泥、古写本、簡牘などに関心をもち、その考証に『史記』を引用している。

『二編軒隨録』の「古今最大著述」では、①司馬遷『史記』、②許慎『説文解字』、③酈道元『水経注』、④杜佑『通典』、⑤沈括『夢溪筆談』の五つが、新しい形式を創始したという。しかし『史記』の諸書は、みな旧聞を収集し、それを考証・編集しただけといい、『夢溪筆談』の方に興味を示している。たしかに『尚書』『周礼』などと比較して、古代の制度を考証した王国維からみれば、『史記』の古代部分は、多くが古典との対比を想定できただろう。この見解は、文通のあったシャヴァンヌとも共通する。

また「史記記六国事多取諸国国史」では、『史記』が『左伝』『戦国策』にもとづきながら、なお諸国の国史を利用したと述べる。その例として、『史記』趙世家のト占や夢占いなどの6例は、列国の旧史によると想定した。これは、顧頡剛「司馬談作史」(1963年)で、趙世家に漢代の人物から聞いた伝承があるという考えに通じ興味深い。ただし、こうした考証は『史記』研究の一部であり、司馬遷の研究ではない。

王国維は、1917年1月に羅振玉の招きで再び来日し、京都で春節を迎えた。そして2月5日に上海に帰り、それからまもなく22日に「太史公年譜」を清書した。かれは翌日、羅振玉への書信で、「その中、頗る発明するところ有り」と完成を知らせている〔『羅振玉王国維往來書信』東方出版社、2000年〕。これは『太史公繫年考略』(倉聖明智大学)として刊行され、のち「太史公行年考」(『觀堂集林』第11, 1929年)と改題した¹⁾。同28日には、「殷卜辞中所見先公先主考」第二稿を書き上げた。これは、甲骨文の中に『史記』殷本紀と同じ系譜が見られることを指摘したもので、ともに日本から帰国した直後に清書されたのである。

こうした経過からみれば、「太史公年譜」は、日本の『史記』研究の動向をうけて発想され、帰国して清書された可能性があろう。

その「発明するところ」とは、雷紹鋒『王国維讀書生涯』(長江文芸出版社、1997年)が、簡潔に整理している。①は、司馬遷の生年で、景帝中元五年(前一四五)とする説を主張したこと。これは今まで最も有力な説である。②は、司馬遷の旅行を詳しく考証したこと。③は、司馬遷が董仲舒や孔安国に学んだ

年代を考証したこと。④は、司馬遷が太史令となった年齢を「38歳」としたこと。これは生年の考証と連動し、とくに索隠が引く『博物志』の記載と、敦煌漢簡との形式の類似を指摘した。⑤は、「太史公」という名称の考証。⑥は、太史令の秩を600石としたこと。⑦は、『史記』の著述開始を太初元年としたこと。⑧は、司馬遷は腐刑を受けた年を天漢3年としたこと。⑨は、「任安への返書」が書かれた時期を太始4年としたこと。⑩は、司馬遷の卒年を、武帝の崩御とほぼ同時期としたこと。⑪は、『史記』の最も遅い記述を、匈奴列伝で李広利が投降する征和3年としたこと。⑫は、『史記』の名前の由来である。

「太史公行年考」は、その後の司馬遷研究の基礎となっただけでなく、生年の考証をふくめ、大きな議論と研究の進展をうながした。この論考は、わが国でも啓蒙期から本格的な学術研究にさしかかっていた時期と重なっており、興味深い現象である。

『史記』の学術的研究

明治時代に大学が設置され、やがて東洋学の研究がすすむと、そのなかで『史記』の学術的な考察が現れた。この時期の代表的な学者と学風については、江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店、1992年）、同編『東洋学の系譜〔第2集〕』（大修館書店、1994年）の評伝にうかがえる。このような関心を反映して、大正時代には新たな『史記』研究のテーマが見られるようになる。

たとえば京都の支那学会の報告で、岡崎文夫「史漢の平準・食貨並に貨殖列伝に就いて」彙報（『史林』2-3、1917年）は、『史記』平準書・貨殖列伝が経済的活動の影響を論述するのに対し、『漢書』では中央政府の経済政策を記述したと区別する。その論旨は、さらに「漢書食貨志上に就て」（『支那学』3-1、1922年）で展開されている。

このほか狩野直喜「司馬遷の経学」（『哲学研究』3-7、1918年）は、『史記』にみえる『春秋』の議論が公羊伝と関係することを論じ、小島祐馬「司馬遷の自由放任説」（『政治経済学論叢』1-1、1919年）、稲葉岩吉「史記ノ漢高祖本紀ニ就テ」（『東亜経済研究』8-2、1924年）などのように、司馬遷の経学、経済思

想や、高祖本紀の位置づけが問題となっている。

また『史記』外国列伝も、すでに考察されている。

- ・石田幹之助「『史記』大宛列伝の英文全訳」（『東洋学報』8-2, 1918年）
- ・今西龍「百衲本史記の朝鮮伝について」（『芸文』12-3, 1921年）

この時期には、『支那学』（大正10年, 1921～昭和22年, 1947）の刊行も注目される。ここでは経学・史学・文学をあわせた「支那学」という学風の中で、『史記』の研究が発表されている。早い時期には、小島祐馬「公羊家の観たる『史記』」（『支那学』1-1, 1921年）が、崔適『史記探源』などの批評をし、岡崎文夫「三史循吏伝を読む」（『支那学』2-6, 1922年）は、循吏伝の相違から、地方官の吏治の変化を指摘した。本田成之「司馬遷の歴史観について」（『支那学』2-8, 9, 1922年）は、『史記』を歴史書としてだけ考えるのではなく、司馬遷の人生観にもとづき描写したもので、経学に通じる価値をもつと論じている。たしかに『史記』のように、経学・史学の未分化な性質の書物は、思想・歴史を通じた観点が必要かもしれない。

また武内義雄氏は、『史記』に関連して「六国年表訂誤」（『高瀬博士還暦記念支那学論叢』弘文堂, 1928, のち『諸子概説』1935年）を発表しているが、早くから日本の古鈔本や書き入れを文献研究に応用する方法に注目しており、先に見た『史記』古鈔本の解題（『支那学』1946年）も、その一部にあたる。岡崎文夫氏は、京都大学史学科を卒業し、大正8年（1919）から2年の中国留学のあと、大正13年（1924）に東北大学に着任したが、その後も中国史学史や『史記』『漢書』に関する論文も多く、のちに『司馬遷』（弘文堂, 1947年）の伝記を著している（「座談会：先学を語る—岡崎文夫博士」『東方学』70, 1985年）。

『支那学』では、つづく昭和初期にも以下の論文が掲載され、先にみた那波利貞氏の『史記』古鈔本研究（1936年）も、この時期のものである。

- ・平岡武夫「五帝本紀の新研究」（『支那学』8-2, 1936年）
- ・重沢俊郎「司馬遷の史学管見」（『支那学』10-4, 1942年）
- ・木村英一「封禅思想の成立」（『支那学』11-2, 1943年）

3 『史記会注考証』と『史記補注』

以上のような明治・大正・昭和初期の学風の中で、長期にわたる『史記』の注釈研究が現れた。それが瀧川亀太郎『史記会注考証』と、池田四郎次郎『史記補注』である。

瀧川亀太郎『史記会注考証』

瀧川亀太郎（諱資言，号君山，1865～1946）の経歴・研究の特徴は、水澤利忠「『史記会注考証』の著者瀧川亀太郎先生を偲ぶ」（『図書』306，1975年）や、同氏の「瀧川亀太郎」（『東洋学の系譜〔第2集〕』1994年）などに、その概略がうかがえる。それによると瀧川氏は、松江の人で、明治20年に東京大学付設古典講習科を卒業し、同30年に仙台の第二高等学校に赴任した。その後、『史記』注釈の集成を志し、昭和5，6年（1930，31）頃に完成したのが『史記会注考証』である。

『会注考証』の跋文によると、その発端は大正2年（1913）に東北大学で『史記正義』の佚文を発見したことがきっかけという。水澤氏の説明によれば、それは古活字本『史記』の欄外に書き込まれた佚文であった。その後、『増補評点史記評林』（鳳文館）の行間や欄外に資料を書き込み、足りない場合は付箋を添付して、そこに書き入れたという。しかし最終的に、底本を金陵本に変えたため、校正のときに混乱を生じたと指摘している。

『会注考証』の特色は、①古鈔本・版本の書き入りを収録したこと、②古鈔本との校勘を行ったこと、③中井履軒『史記雕題』、岡白駒など日本人の注釈を多く収録したこと、などがあげられる。このうち②の校勘は、大島賛川の「博士家本史記異字」を前田家から借用したものを基礎とし、水澤利忠氏はそこに見える“南化本”が上杉家所蔵の南宋黄善夫本であり、“三条本”が三条西実隆が書写した元彭寅本であることを確認する。したがって『会注考証』は、古鈔本などによる本文の校訂、歴代注釈の収集、正義佚文の補足などが特色であり、のちに中国でも出版され、1985年には『史記会注考証附校補』（上海古籍出版社）

が刊行された。しかし、その底本や正義佚文の性格をめぐることは、中国の研究者の批判がある。これについて神田喜一郎「賀次君氏の『史記書録』」（『中国文学報』10, 1959, 『東洋学文献叢説』二玄社, 1969年）では、たしかに瀧川・水澤利忠両氏に誤謬があることを認めつつも、日本の『史記』研究の事情が不明なことからくる誤解について説明している。また最近では、袁傳璋「程金造『史記正義佚存』偽托説」平議」（『台大歴史学報』25期, 2000年）が、さらに詳細に中国学者の誤解を論証している²⁾。

著述の評価は、『史記会注考証附校補』の出版説明で、日本著作20数種と中国著作100数種の典籍を引用し、また正義佚文を補入するなど、この時点で最も資料豊富な『史記』注本で、群書を捜す労を省く重要な参考書と位置づけている。しかし一部に、1) 資料に遺漏がある点、2) 考証が一説に偏ったり、失当する所がある点、3) 訓詁・断句に問題がある点などを指摘するのは、おおむね穏当な評価と思われる。

また瀧川氏は、考証のほかに「史記総論」を著し、ここに太史公事歴、太史公年譜、史記資材、史記名称、史記記事、史記体製、史記文章、史記残欠、史記附益、史記流伝、史記鈔本刊本、史記集解索隱正義、史記正義佚存、司馬貞張守節事歴、史記考証引用書目挙要を記しているのは、『史記』研究史に通じる成果である。

池田四郎次郎『史記補注』

池田四郎次郎（号蘆洲, 1864～1933）は、大阪の生まれで、19歳のとき中井履軒の弟子であった近藤元粹（南州）に師事し、のち上京して三島毅（中洲）に学んだ。その伝記には、池田英雄「池田蘆洲の学風とその事績」（無窮会『東洋文化』復刊30・31・32, 1973年）、水澤利忠「池田蘆洲の為人とその史記研究」（『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』講談社, 1979年）などがある。

すでに池田氏は、20代の1893, 94年に『校注史記読本』第1冊（本紀）、第4冊（列伝）、第5冊（列伝）を著していたが、その後の増補改訂をくわえ、さらに第三稿が『史記補注』となったものである。その方法と特色は、①文字の

校勘、②史実の考証、③原文の解義といわれる。

まず①文字の校勘では、草稿作成の底本として『増補評点史記評林』（鳳文館、1882年版）を用い、明・王震沢の王本で文字の異同を正している。三家注の校勘は、清・張文虎の『史記集解索隱正義札記』5巻により、さらに梁玉繩『史記志疑』と中井履軒『史記雕題』を多用するという。②史実の考証と、③原文の解義では、梁玉繩『史記志疑』と中井履軒『史記雕題』を第一としながら、元・胡三省、清の錢大昕・王先謙・王念孫・吳汝倫などの考証を引用し、さらに未刊の写本をふくめて日本人の注釈を収録した。そして全編を通じて、390余種類の書籍を引用している。

しかしこの著述は、生前に刊行されることがなく、また瀧川亀太郎『史記会注考証』の刊行開始を知りながら、両者は交際のないまま終わった。わずかに昭和8年（1933）元旦、池田四郎次郎氏が瀧川亀太郎氏に宛てた手紙が残されている〔巻末資料〕³⁾。

この書信では、『史記会注考証』の完成を祈るとともに、『史記』十二本紀、十表、八書、世家、列伝の構成に対する自説を述べている。また後半では、石川鴻斎校訂の鳳文館版『史記評林』の校訂が、張文虎や清朝考証学者の説と一致する点が多いと述べており、『史記』底本に対する考証の一端がうかがえる。しかし池田氏は、この書信を投函したあと、2週間後に交通事故で逝去された。

『史記補注』は、1972、75年に池田四郎次郎著・池田英雄増補校訂『史記補注』上（本紀・世家）、同下（列伝）として刊行された。中編にあたる表・書の部分は、すでに多くの注釈がほどこされていたが、最終的に未完であったことは惜しまれる。また『史記会注考証』の活字本が早く世に出て、諸家の注釈や日本の古鈔本が知られたのに対し、『史記補注』の内容はあまり知られていない。しかし池田氏の研究の特徴は、さらに『史記』の研究史と解題を重視した点にあり、これは後に中国より早い業績として評価されている。

『史記雕題』の引用をめぐる

以上のように、瀧川亀太郎『史記会注考証』と池田四郎次郎『史記補注』は、

ともに最良のテキストを求め、中国と日本の注釈を集成しようとした。そして瀧川氏の業績は、とくに古鈔本の収集が特色であり、その中に『史記正義』の佚文がふくまれていた。これに対して池田氏は、日本人の注釈をはじめ諸家の注釈を収集すると同時に、のちに日中学者の研究提要や、『史記』研究史を手がけたことが先駆的な業績である。

ところで早く世に出た『史記会注考証』は、一方で高い評価を受けるとともに、また厳しい批判を受けたことは、先にみた通りである。それらの一部は、誤解にもとづくものであったが、近年になって再び別の観点からの批判が現れている。

- ・寺門日出男「『史記会注考証』撰述に見られる非学問性一埋もれた中井履軒撰『史記雕題』」（『中国研究集刊』日号、1990年）
- ・寺門日出夫「日本人の忘れられた『史記』注解書—『史記会注考証』前史」（『国文学論考』29、1993年）

寺門氏の論点は、『史記会注考証』にみえる注釈の一部が、明治の『史記評林』に付随するものや、中井履軒『史記雕題』でありながら、その引用を明記していないというものである。そして懷徳堂文庫の『史記雕題』と比較して、その該当部分を指摘している。これらは、本当に剽窃というべきものであろうか。

その一例として『史記』呂后本紀をとりあげ、『史記会注考証』『史記補注』にみえる『史記雕題』の引用形態を確認しておこう。

まず『史記雕題』では、わずかな字句の校訂をふくめて計33ヶ所の注釈があり、その内容は、以下のように分けられる。

- 1) 先行の注釈の当否を論じ考証するもので、『漢書』顔師固注なども参照する。
- 2) 本文・注文の衍字・同義語、削るべき字句などの考証。
- 3) 年代の考証で、『史記』年表とも比較する。
- 4) 文意を理解しようとするもの。
- 5) 制度・称号・暦法などを理解しようとするもの。
- 6) 人物・歴史評価に関するもの。とくに末尾には長文の解釈があり、呂后

が戚夫人を殺す事件で、むしろ高祖と戚夫人を非とした説明や、諸呂の乱は高祖から生じたとする論点が注目される。

『会注考証』『史記補注』は、このうち1)～5)の項目で、簡単な字句の校訂を除く注釈をともに引用する。たとえば『会注考証』は、計10ヶ所を引用するが、すべて「中井積徳曰」と記している。また『史記補注』は、計11ヶ所を引用し、すべて「履軒曰」と表記している。ただし両者の取捨選択には、同じ注釈もあるが、微妙に関心が相違している。また両者は、かなり原典に忠実に引用しているが、一部に省略した文があり、必ずしも中井履軒の『史記雕題』を忠実に伝えていない部分がある。しかし反対に、中井履軒『史記雕題』と同じ内容を収録しながら、それを自己の注とした例は見られない。このほかにも『会注考証』の引用は、圧倒的多数が「中井積徳曰」と記している。このような引用の形式と比べて、寺門氏が指摘している箇所は極めてわずかであり、また必ずしも中井履軒『史記雕題』が出典ではない可能性をふくんでいる。したがって呂后本紀を中心にみれば、『会注考証』は独自の観点から『史記雕題』を引用し、引用の要約や不注意はあっても、剽窃といえるような形式を取っていないと判断される。この点は、中井履軒の自筆本が公刊されたことから、その原典にあたって確認できよう。

これに関連して、『史記会注考証』『史記補注』は、ともに最良のテキストと注釈を提供しようとしたが、これを底本とするには限界があらわれている。なぜなら今日では、『史記』南宋黄善夫本の影印や、中井履軒『史記雕題』など注釈の影印によって、その校訂・引用に修正すべき部分が生じているからである。しかし両者は、日中両国でも早い時代に『史記』版本と注釈の一覧が便利なテキストを提供し、この観点はその後も受け継がれていることを忘れてはならない。

4 『史記』への関心の拡大

司馬遷と『史記』の研究

明治末から大正時代にかけて、しだいに学術的な研究がすすんだが、昭和初期から20年代は、さらに問題関心が拡大し、また著作・論文の数も増加してきた。

司馬遷の研究では、桑原隲蔵「司馬遷の生年に関する一新説」（『史学研究』1-1, 1929年）があり、ここでは司馬遷の生年を景帝中元5年（前145）とする王国維の説と、張惟驥の説に対して、索隠が引く『博物志』による武帝建元6年（前135）説を提唱する。

司馬遷の思想では、藤田元春「司馬遷の見たる古代支那の人文地理に就いて」（1931年）、同「司馬遷の人文地理学」（『立命館文学』1-12, 1934年）がある。その論点は、『漢書』地理志の人文地理には『史記』貨殖列伝を援引した部分があることから、司馬遷を最初の人文地理学の開拓者とみなし、その見識を評価する。このほか李源鶴「司馬遷の史観」（『京城帝大史学会誌』7, 8, 9, 1935, 36年）や、中山久四郎「司馬遷史学の二大要点」（『史潮』7-2, 1937年）などがあり、中山氏は司馬遷が孔子を尊敬していた点と、地理観察にすぐれた点を論じている。

重沢俊郎「司馬遷の史学管見」（『支那学』1942年）は、のちに「司馬遷研究」（『周漢思想研究』弘文堂, 1943年）として改稿されたが、ここでは、『史記』の体例からみた司馬遷の史学思想と世界史的性格や、游俠・貨殖列伝にみえる自由主義思想を論じている。

経書との関連では、豊田穰「史記に引用せる尚書に就きて一清儒の研究を中心として」（『漢学会雑誌』1-2, 1933年）、同「漢初の公羊学と史記」（『漢学会雑誌』2-2, 1934年）がある。佐藤匡玄氏は「史記引く所の尚書説」（『東方学報』京都9, 1938年）で、司馬遷が今文尚書を学ぶとともに、古文尚書を引用する点に注意する。これに関連して、内野熊一郎「史記における史遷の詩説」（『東方学報』東京10-1, 1939, のち『漢初経書学の研究』清水書店, 1942年）があ

る。

つぎに『史記』研究では、『史記』翻訳の解題や概論が書かれた。たとえば桑原隲蔵「『史記』解題」（『史記』漢文叢書，有朋堂書店，1920年）は、のち『桑原隲蔵全集』第2巻（岩波書店，1968年）に収録され、その概略がうかがえる。また池田四郎次郎氏の「統通俗漢籍解題一史記について（1～4）」（無窮会『東洋文化』105～108，1933年）は、『史記』の二体・名称・編纂から『史記』の古今，司馬遷の伝記に及んでいる。

このほか岡崎文夫氏は、大正時代から『史記』に関する論考を発表していたが、さらに後世に批判されている『史記』孔子世家の伝記や，春秋学との関係，『漢書』との比較を考察し，中国史学史の中で『史記』を位置づけている。

・岡崎文夫「史記の孔子伝大要」（『歴史と地理』27-1，1931年）

同「司馬遷と班固」（『史林』17-3，1932年）

同「史記と春秋学」（『文化』1-9，1934年）

また「支那史学思想の発達」（『東洋思潮』東洋思想の諸問題，岩波書店，1934年）は，内藤湖南『支那史学史』につぐものであり，「四：史記と漢書（史学体例の樹立）」で『史記』『漢書』の特徴を論じている。

『史記』の編纂については，山下寅次「史記編述年代考」（『山下先生還暦記念東洋史論文集』1938年）があり，のち補訂して『史記編述年代考』（六盟館，1940年）とした。その要点は，司馬遷は昭帝始元3年（前84）に卒し，『史記』はそれ以前に完成したという。また山田勝美「史記摺筆年代私攷」（『大東文化』7，1934年）もある。

『史記』各篇の研究でも進展があり，平岡武夫「五帝本紀の新研究」（『支那学』8-2，1936年）は，その系譜や，五帝の構成と特徴，五徳説との関連などを述べて，前漢時代における古代史観を論じている。また本城説治「三代世表考一般周始祖を中心として」（『史淵』15輯，1937年）がある。

八書では，橋本増吉「史記封禪書について」（『史学』16-4，1938年），清水嘉一「史記天官書恒星考」（『東方学報』京都14-3，1944年）などの論考がある。

『史記』平準書などの分野では，穂積文雄「史記平準書に見はれたる経済思想」

(『経済論叢』49-3, 1939年), 同「史記・平準書にあらわれたる貨幣思想」(『経済論叢』55-6, 1942年)がある。藤田至善氏は「史記漢書の一考察—漢代年号制定の時期に就いて」(『東洋史研究』1-5, 1935年)を発表している。

また加藤繁氏は、公田連太郎氏と共訳で『訳注史記列伝』全3冊(富山房, 1940~42年)を刊行したのにつづき、別に『史記平準書・漢書食貨志』附;『史記』貨殖列伝(岩波書店, 1942年)を著している。これは、『史記』の社会経済史研究の基礎を築いた業績といえよう。

また和辻哲郎『孔子』(1938初版, 岩波書店, 1988年)は、一般書であるが、武内義雄氏の『論語』の研究を受けて、孔子世家の伝記を分析している。

このように昭和初期では、その後の『史記』研究の原型ともいえるべき成果がみられ、これらの継承をうけて戦後日本の『史記』研究が展開している。

『史記』の研究史

以上のように、日中において『史記』の注釈・研究がすすむと、これを展望しようという研究が現れた。すでに瀧川亀太郎『史記会注考証』史記総論には「史記流伝」があり、その付篇として日本の『史記』受容を述べたが、さらに池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」(二松大学雑誌『二松』2, 1932年, のち『史記研究書目解題新編』に再録)は、詳しく『史記』受容の変化を論じている。

また池田氏は、日中の『史記』研究の提要を試み、これは池田四郎次郎著・池田英雄校訂増補『史記研究書目解題稿本』(明德出版社, 1978年)として刊行された。ここでは、以下のような項目がある。

- 1 史記の版本と其参考書, 2 諸本, 3 総説, 4 校訂注釈(全書),
- 5 校訂注釈(部分), 6 校勘, 7 文字・音韻, 8 文評, 9 佳句・名言,
- 10 史・漢異同, 11 太史公年譜, 12 地理, 13 国字解, 14 稗史,
- 15 史記研究関連図書, 16 附録: 史記佚書十九種

この『史記』研究の提要は、張新科・俞樟華『史記研究史略』附録; 日本《史記》研究概述(三秦出版社, 1990年)で、中国より早い『史記』研究史の業績

と評価している。また本書は、池田四郎次郎・池田英雄『史記研究書目解題新編』私家版（長年堂，1981年）として増補されたが、部数が限定されており入手は困難である。さらに『史記』の研究史は、池田英雄氏が継続して考察され、『史記学 50年一日・中「史記」研究の動向』（明德出版社，1995年）のような成果に結びついている。本稿の『史記』受容と研究の展望は、こうした先行研究によるところが大きい。

お わ り に

日本の明治から大正・昭和時代の『史記』研究は、中国の動向と同じように、著書・論文の数が増加した。その内容も、『史記』版本の考証や、古鈔本の影印、和訳、司馬遷と『史記』の考察などが進んだ。これは、戦後日本の『史記』研究につながるものである〔文献19〕。

こうした日本の『史記』受容で、とくに注目したのは「『史記』がいかにかに読まれてきたか」という点であった。日本の漢籍について、その輸入や書誌学的な考察は多いが、具体的な受容と研究動向を考察したものは少ない。ここでは、『史記』をはじめ史書の一部を紹介したにすぎないが、いかにかに読まれてきたかというアウトラインがうかがえるとおもう。

なお日本の『史記』研究の動向は、1991年4月に北京師範大学で開催された《史記》研究会で「近年来日本的《史記》研究，附：史記研究文献目録稿（日本篇）」を報告したのが最初である。その後、1995年8月に陝西師範大学で、司馬遷生誕2140周年記念国際学術討論会が開催されたとき、徐興海主編『司馬遷与《史記》研究論著專題索引』（陝西人民教育出版社，1995年）が提出されたが、その日本文献目録は1991年の私の報告にもとづいている。

のちに私は、早苗良雄、小林春樹両氏の協力をえて、別稿「『史記』『漢書』研究文献目録（日本篇）」（1994年、秦俑博物館の黄雪美訳，1995年）を作成した。それと別に、1995年の学会で張大可先生から日本の『史記』研究を紹介する文章を依頼された。本稿と別稿三篇は、その原稿を補足したものである。中

国への紹介には、このほか小澤賢二氏の「日本伝存旧抄卷子本『史記』について」と、尾崎康氏の「日本所在の『史記』刊本」を作成していただいた。

また2000年9月に、西安で開催された「司馬遷与《史記》學術討論会」では、「日本的《史記》研究与現状」として、ふたたび日本の『史記』研究を紹介した。こうした紹介が、日中の学术交流に貢献できればとおもう。

日本の文献目録は、ほかに吉原英夫編『「史記」に関する文献目録』（1997年）があるが、先の拙稿の目録とともに入手しにくく、将来は「日本の『史記』研究」の紹介と、『史記』研究文献目録の補訂をあわせることができれば、利用に便利ではないかと考えている。まだ不十分な点も多く、粗い見通しにすぎないが、御教示をいただければ幸いである。

注

- 1) 王国維は、当初「太史公年譜」と名付けていたが、のち『太史公繫年考略』（倉聖明智大学）と改題して刊行した。この奥付は1916年となっているが、書信によれば脱稿したのは1917年のことである。また「太史公行年考」と改題して『觀堂集林』第11（1929年）に所収したが、内容はそのまま、最初の完成度の高さに驚かされる。
- 2) 袁傳璋「程金造『《史記正義佚存》偽托說』平議」は、2000年9月に西安で開催された「司馬遷与《史記》學術討論会」の提出論文による。
- 3) この書信は、水澤利忠氏が入手された複写を池田英雄氏に渡されたもので、池田四郎次郎・池田英雄『史記研究書目解題新編』私家版（長年堂、1981年）による。その句読は、水澤利忠「池田蘆洲の為人とその史記研究」（1979年）と、『解題新編』によって適時ほどこした。なお池田氏の蔵書は、文教大学越谷図書館に寄贈され、『池田蘆洲・田口福司朗旧藏漢籍コレクション目録』（1996年）が作成されている。

参 考 文 献

- 1 滝川亀太郎『史記会注考証』（史記会注考証校補刊行会、1956～60年）
- 2 水澤利忠『史記会注考証校補』（1957～70年）
- 3 『史記会注考証校補刊行会彙報』創刊号（史記会注考証校補刊行会、1955年）

- ・竹田復「史記会注考証校補刊行の経過と本書の特色」, 徳富蘇峰「陳言一則」, 諸橋轍次「精苦十年史記会注考証校補成る」, 大倉邦彦「日本漢学の一成果」
- ・瀧川亮「父の思い出」, 宇野哲人「史記会注考証刊行の経緯」, 阿部吉雄「史記会注考証発刊当時の思い出」, 仁井田陞「史記会注考証の再版及び校補の出版について」, 山岸徳平「史記会注考証の思い出」
- ・岩井大慧「史記会注考証校補本刊行に憶う」, 貝塚茂樹「史記の考勘記として」, 三上次男「中国古代史研究のために」, 斯波六郎「大島費川『史記攷異』について」, 長澤規矩也「天朝傳本史記説について」, 山崎宏「史記正義佚文拾輯の功について」
- 4 水澤利忠『『史記会注考証』の著者瀧川亀太郎先生を偲ぶ』（『図書』306, 1975年）
- 5 『瀧川君山先生故居碑文釈文』（島根大学教育学部漢文学研究室, 1990年）
- 6 池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」（二松大学雑誌『二松』2, 1932年）
- 7 池田英雄「池田蘆洲の学風とその事績」（無窮会『東洋文化』復刊30・31・32, 1973年）
- 8 水澤利忠「池田蘆洲の為人とその史記研究」（『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』講談社, 1979年）
- 9 池田四郎次郎著・池田英雄増補校訂『史記補注』上, 本紀・世家（明德出版社, 1972年）。同『史記補注』下, 列伝（明德出版社, 1975年）
- 10 池田四郎次郎著・池田英雄校訂増補『史記研究書目解題稿本』（明德出版社, 1978年）
- 11 池田四郎次郎・池田英雄『史記研究書目解題新編』私家版（長年堂, 1981年）
- 12 『池田蘆洲・田口福司朗日蔵漢籍コレクション目録』（文教大学越谷図書館, 1996年）
- 13 池田英雄「著作より見たる本邦先哲の史記研究—古今伝承1300年間の消長」（『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』所収, 1984年）
- 14 池田英雄『史記学50年—日・中「史記」研究の動向』（明德出版社, 1995年）
- 15 池田英雄「日・中各時代に於ける《史記》受容のあり方を検証す」（『栗原圭介博士頌寿記念東洋学論集』所収, 1995年）
- 16 池田英雄「最近五十年来《史記》研究の展開（1945-1995）—日・中の比較と、その長短」（無窮会『東洋文化』76, 1996年）
- 17 覃啓勳『《史記》与日本文化』（武漢大学出版社, 1989年）
- 18 張新科・俞樟華『史記研究史略』附録；日本《史記》研究概述（三秦出版社, 1990年）
- 19 藤田勝久「日本の『史記』研究」（『愛媛大学法文学部論集』人文学科編7, 1999年）
- 20 藤田勝久『『史記』の日本伝来と受容』（同上, 人文学科編9, 2000年）
- 21 藤田勝久「日本の『史記』受容—鎌倉・室町, 江戸時代」（同上, 人文学科編10, 2001年）
- 22 楊燕起・俞樟華編『史記研究資料索引和論文專著提要』（蘭州大学出版社, 1989年）
- 23 徐興海主編『司馬遷与《史記》研究論著專題索引』（陝西人民教育出版社, 1995年）

明治以降の『史記』研究

- 24 鄭之洪『史記文献研究』（巴蜀書社，1997年）
- 25 藤田勝久「『史記』『漢書』研究文献目録（日本篇）」（『「史記」「漢書」の再検討と古代社会の地域的研究』科学研究報告書，愛媛大学教育学部，1994年）
- 26 吉原英夫編『「史記」に関する文献目録』（北海道教育大学札幌校，1997年）

*資料《池田四郎次郎氏から龍川亀太郎氏への書信》

謹賀新禧

爾来ハ御疎音ニ打過萬々御海怨被成下度候。

高著史記會注考證ハ、漸次購求架上ニ挿ミ居候、一日モ早ク全函御刊了ノ程奉祈候。小生モ往年、史記讀本ヲ刊行セシ以来、今ニ殆ソド四十年、其間參考トナルベキ材料ヲ見付次第、集採致シ居リ、傍ヲ研究致シ居リ候へ共、今ニ何等具體的作書モナク、誠ニ慚愧ニ不堪候。貴殿ニハ、該史御研究ノ由、兼々承リ居リ候ニ付、一度拝芝ノ上、種々高教ヲ仰ギ度ト乍存、其ノ機ヲ不得、誠ニ遺憾ニ存候。遷史ハ、誤闕多ク、調ブレバ調ブレ程、疑念相生ジ、人ヲシテ五里霧中ニ彷徨セシムルノ感アリ申候。

古人ガ世家ハ始于太伯、列傳始于伯夷ヲ言フ人ハ多キモ、本紀始于堯舜、八書始于禮、年表始于三代ヲ言ハザルハ、未ダ尽サズト存候。史記ハ黄帝ニ始ルニ非ズ、陶唐ニ始ルト存候。

十二本紀ハ、春秋十二公ニ擬ス、此ハ拙生ノ愚考ナルモ、近頃章学誠ノ丙申劄記ニ此說アリ、私ニ暗合ヲ喜ビ居候。

項羽ヲ本紀トシ、呂后ヲ本紀トシテ、惠帝ヲ認メザルヲ、史記著作ノ義例ニ通ゼザル人ハ、彼レ此レト言フモ、取ルニ足ラザルモノト存候。

史記ヲ讀ムニハ、専ラ攷据家ノ說ノミニ據ル可ラズ、文評家ノ說ニモ多少重キヲ置クベキカト存候。

以上二、三ノ愚考ヲ録シ、御高教ヲ仰ギ申候。

更ニ一ノ疑問ハ、

鳳文館版石川鴻齋校訂ノ史記評林ハ、本文及ビ注文ハ、八尾、紅屋、鶴牧ノ評林本ニモ非ズ、又明版、朝鮮版ノ評林本ニモ非ズ。ソノ校訂セシ箇所ガ往々張文虎、ソノ他ノ清朝攷證家ノ說ト一致セル点アリ。元来凌氏ノ評林本ハ、王氏本、柯氏本等ヲ參考シタルナルモ、之ヲ王氏本等ト比ブルニ、符合セザル点多シ。然ルニ鳳文館本ハ、往々王本等ニ一致セル所アリ。又、注ニ□ヲ字傍ニ加フル杯ノ處モアリ。是ハ果シテ、何本ヲ藍本トセシヤ。該書ハ明治十三、四年頃ニテ、石川氏ハ清國公使黎氏及楊守敬其他、清客トモ交リアリシ故、誰カノ手定本ヲ入手セシニ非ルカ。是ハ先年来、誰ニ尋ナルモ、明答ヲ不得。若シ御承知ニ候ヘバ、御示教被下度御願申上候。書不尽意、御推讀願申候。

昭和癸酉（八年、一九三三）元旦

池田四郎次郎

拝掌

君山老臺